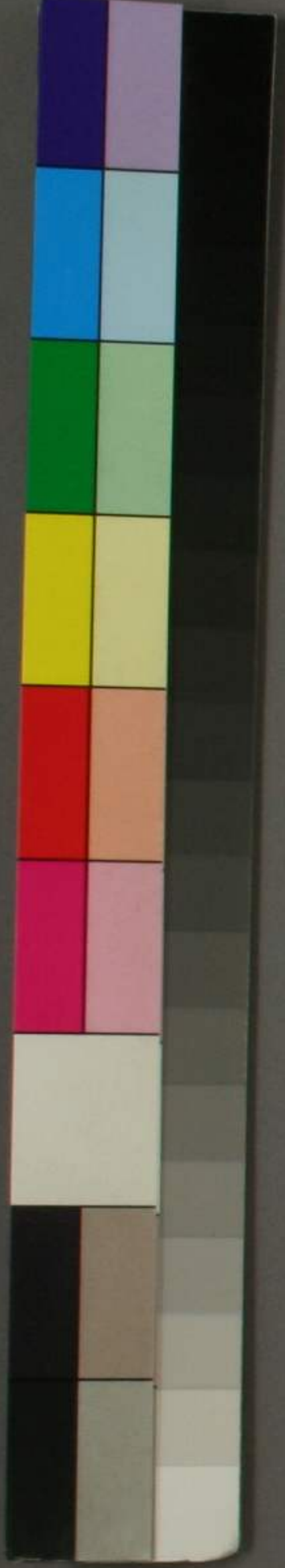


新書筆記圖會

三

13
1830
9



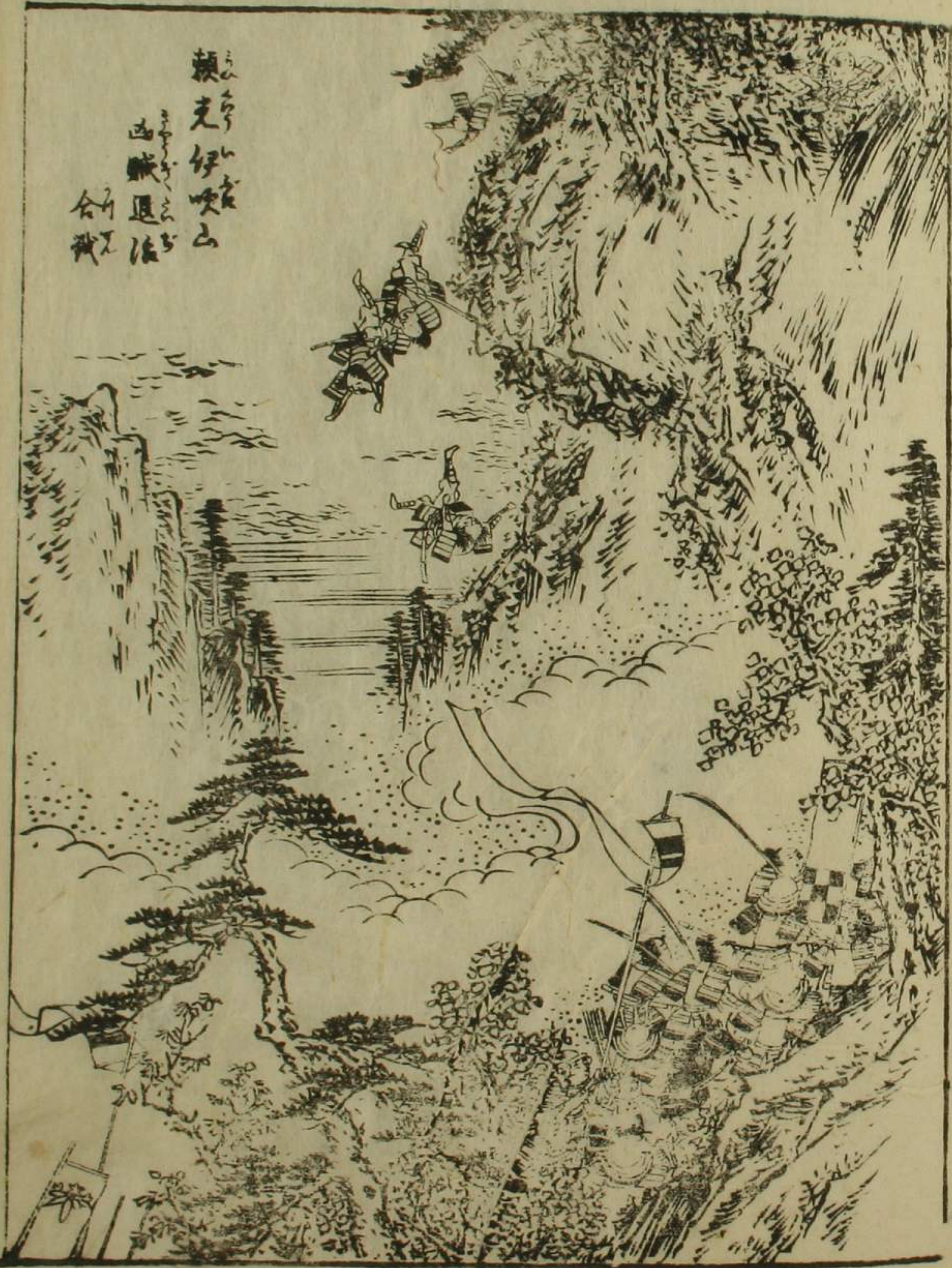
1830
9

前太平記圖會卷之五

目錄

伊吹山凶賊退治
 滿慶入道薨逝
 千手丸殿誕生
 賴光朝臣逝去天王離散
 平忠常謀叛隅田川合戰
 賴信朝臣東國下向
 川越中野合戰卜部武俊最期
 平家敗北忠賴忠將戰死
 賴信騎馬涉海忠常降參





頼朝伊弉
 凶賊退治
 合戦

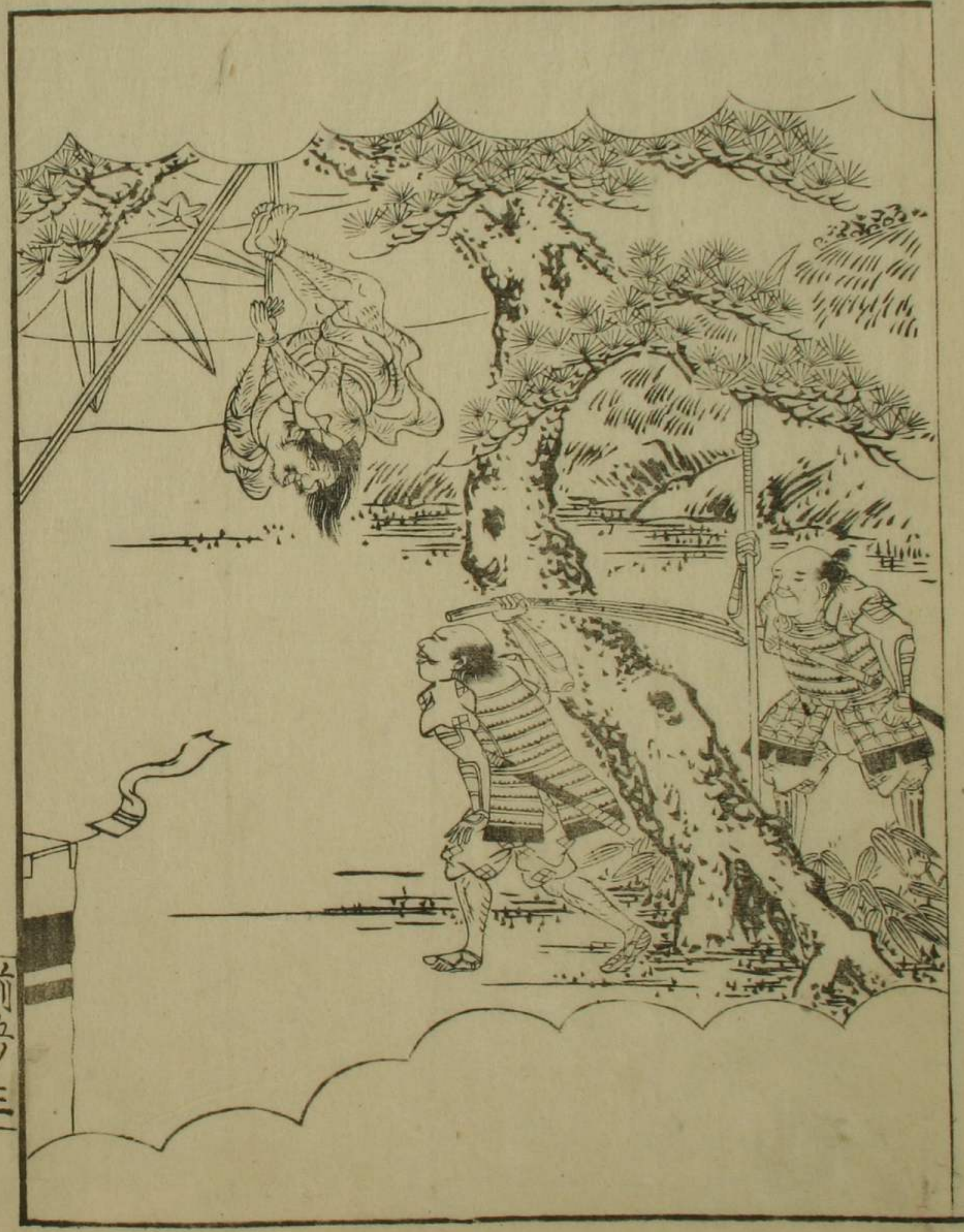
八幡太郎殿誕生
 通法寺草創頼信朝臣逝去
 頼義朝臣奥州下向
 伊具十郎永衡被誅
 靈泉涌出官軍止渴
 安倍頼時戦死

前太平記圖會卷之五

伊吹山凶賊退治

正曆五年の春諸國の群盜蜂起して世の中騒がしむ。滿政惟時頼親頼信等の武功に
より門々悉く去るに及ばず。又同年の秋に伊吹山酒類童子の徒等、近國を劫はり、
千丈巖の妖鬼酒類が骨肉の眷屬を大に山の大将ありしが、かの城は落の徒は方と味
今度又此山を現出さしむと、指ぐの沙汰ありし。徑進天聽致驚し、けさバ依卿衆評有
て討手の大将松尾元久、今度も亦頼元船長と共に出され、松尾元朝撰不應にて
出陣し、下へ向ひし。程本在京の武士も勿論近國の法士我もくも、就奮り雲霞のふとく
集りて、この所へ大に進軍の時軍勢僅ありし。鬼神と云ふに聞懼して
得促小徒ざりし者共るり頼元宣ひ、今度松尾元久の凶賊異々し、流布せし
て、なるとは事も何あるとぞ。是年千丈巖の妖鬼通力変化ありて、法人の怖し
に傲く已酒類と名の老何素奇異の事ありと云ふも、もるは事小大

國の費と彼さん事然るに、流るる集りたる國々の勢の中二分一を強し、みか
本國へ帰るべし、多勢と著るは事として、唯給られども、みか強しるも、我陣ん
とりの者も、やうりるは、以上い存を、中々其勢都合二萬餘騎、正曆五年八月四日、京
都放多々、使の志賀の旧給、小打、出軍勢を配分して、二手、小能、王弟、く、取、て、向、て、
形、比、比、の、山、下、烈、く、湖、上、の、運、渡、移、形、を、な、れ、大、將、頼、元、船、長、を、一、萬、二、千、餘、騎
に、く、頼、多、の、橋、と、赤、渡、く、東、進、に、う、大、子、小、向、り、長、男、頼、國、船、長、を、渡、邊、酒、田、松、相、具、し、
八、子、好、珍、ゆ、く、西、進、に、う、越、前、路、と、廻、り、橋、を、向、り、越、前、を、取、り、善、く、討、ち、陣、を
進、に、賊、の、首、領、松、尾、出、し、虜、ふ、せん、を、討、ち、た、子、も、橋、を、唯、周、を、徹、る、を、り、大、子、乃
勢、を、神、齋、り、楯、の、板、を、衝、き、く、攻、り、橋、の、去、り、馬、の、鼻、狐、を、並、べ、二、子、小、分、て
菓、落、し、入、札、を、切、り、廻、り、て、小、遊、浩、の、こ、小、遊、下、を、捕、分、捕、さ、り、百、七、捕、人、を
せ、生、捕、を、所、賊、洗、い、よ、く、度、を、去、り、一、張、り、及、び、て、我、の、岨、の、所、存、り、決、く、逆、に、道
も、形、く、殺、千、丈、は、れ、若、屋、へ、入、頼、と、は、お、く、上、下、重、重、と、威、を、己、が、太、刀、刀、小、費、と、取、り



岩窟に骨公碑と徹摩不成とあり目もあらぬありさぬなりなりと虜と大將軍の
毎檢も曝もあらずと聞ゆ酒願やうとる程の者なりと虜の中も物具出さ
さうぬをたそ八五人あり一は出でて大將酒願を聞へ一は河邊を渡りて
死討してさう死生の間とやべ一とく掃くも尋ねひかれさみか首は低く何と物
言はさうと敵同もなとる一とてねの本に逢ふ縛付く責問を初程の程唯うさ
たふ計もく更も落は次第酒願は血下り目にはより流せりたれ好の地ささふ細
とやべ一とて酒願を即繩を解免して地を先薬さど飲せり尋ねられは我々
さみか國の聖伏共て作が先年十丈大に酒願を滅され酒願本をいへる
鬼神なりや人の怖もすに我々人を殺さんかお源家の人を滅し終は僻み
毎の酒願本といふ鬼とは山に在と申は在と所は小盗人我々とて此集
てみか下風よまき鬼神といふ威を假人とて財寶を奪ひ奪ひんが爲さ月
冷くを申ゆとせ作らう一向天下の神歌と成る所なるもいふく作ひ一と

思はば取圍は是非非れ一我小及び作と一々向は裁りたり去ども采果と計と申
面よんせと不審りたりを細申は終なる役所の中に女の好を集り居り作は出
して尋申べきを人といへる實にやて召殺りみか眉目號世は類少たり年か
十七八より廿四五歳斗ほどの美女は好人が持て有る大將軍父子四天王はめ
國の武士湯と魏とくく並居るに傍に上繩付る虜衆らと殺され
集たる中引居られ今や命と召さるかと思はれ消りて唯泣き泣き泣き
邊に好きくはの痛くを歎き海等は是る虜の妻子なり大將軍よりあり
聞はる旨ありま並申ゆ一は命を渡さず申賜く得るは一はわくも
あれ部と申さる悲用はさへ一を申は一人の女涙を押して為帳の事と作
その款はさく一人の虜の妻子はくは作か飽ぬ中引殺され或は親子の
思をささ言はれはさくも驅逐と有るあはれ非は構はさる鬼神は其所をわ
云成るあはれさくはを男共我妻よ妻よと戯は毎下面白く酒をさふ

くは公のぬれ渡の枕本夜とぬ一早曉は半上小減きく討子の津使に下され
かや神小新に佛小預ひて曇月日公其へ活し今まで今生べしと云ふにり
なあり一甲斐ありくかか討子と遠きと半の青龍と其のく其國是
と其の郷は何某の娘何某の妻より長と公の津惠はく令公も幼も親子と輝の
對面はく世と歩行りやせは婦人の女房みまると合せく日音よりと虎くは
大將軍とく老を布せ並居るは軍勢猛と武士をふる但長孤傳され遣す
神と我と流しはれは上いとて再往の亂明もを乃は白旗の懸相遠なく酒類童子や
陣へ一一向の僻事ありあり一六獲く九人の張本其介の慶百六十婦人よは
小引世目も及上落もあひり即囚ま一女告故郷へ送り返一給ひはれぬる人
の種くる公地して深き民の父母ありと決と流して善合り

満慶入道薨逝

多田新意満慶入道今年八十六ゆく世一が老病日夜小迫つと最類なく

見一給ひ一福小公達に申に及は從類衆人度食は志是藥餌術とそしけりや女
看意あつりけるも更小其駭もねく又さる若しけかるやと見くぬれ唯眠と
ゆるおけりぬれおつり多と主上候も法皇皇孫も甚驚おほしめて日々勅問あり
趣して在京の武士法國の大名門本丹市成さ一異例の様を務まは及ある満慶々
も向く室へなるは我多事奉公の忠勅小依く厚く朝恩小降と家後門設豊ありて
去るを執身八十餘茶の上書公持ら今生の業權已極りぬ今持小命そんは返朝
時目小中より致せしと一雲の神はは廟空小止く必弓矢と守候べし又南院
鳴動とのけく後代天下安否の兆とすべしこれ我誓するを聽く別殿はひのひに意に
法華并要品を唱へ臨終の時節とぞ侍とる公達御衆人涙公押入ひ津枕を誰
依ひるが見誓ひ給ひ一時日公か一も遠は長徳三年八月廿七日終小薨逝し給ひる
人々の悲歎いすははは嗚呼惜むべし生後教度の忠誠をそし毎度衣襟と傳
ちり武威の浪四海小溢れ忠貞公上本そし慈愛と下に施し實に大度の良將そ



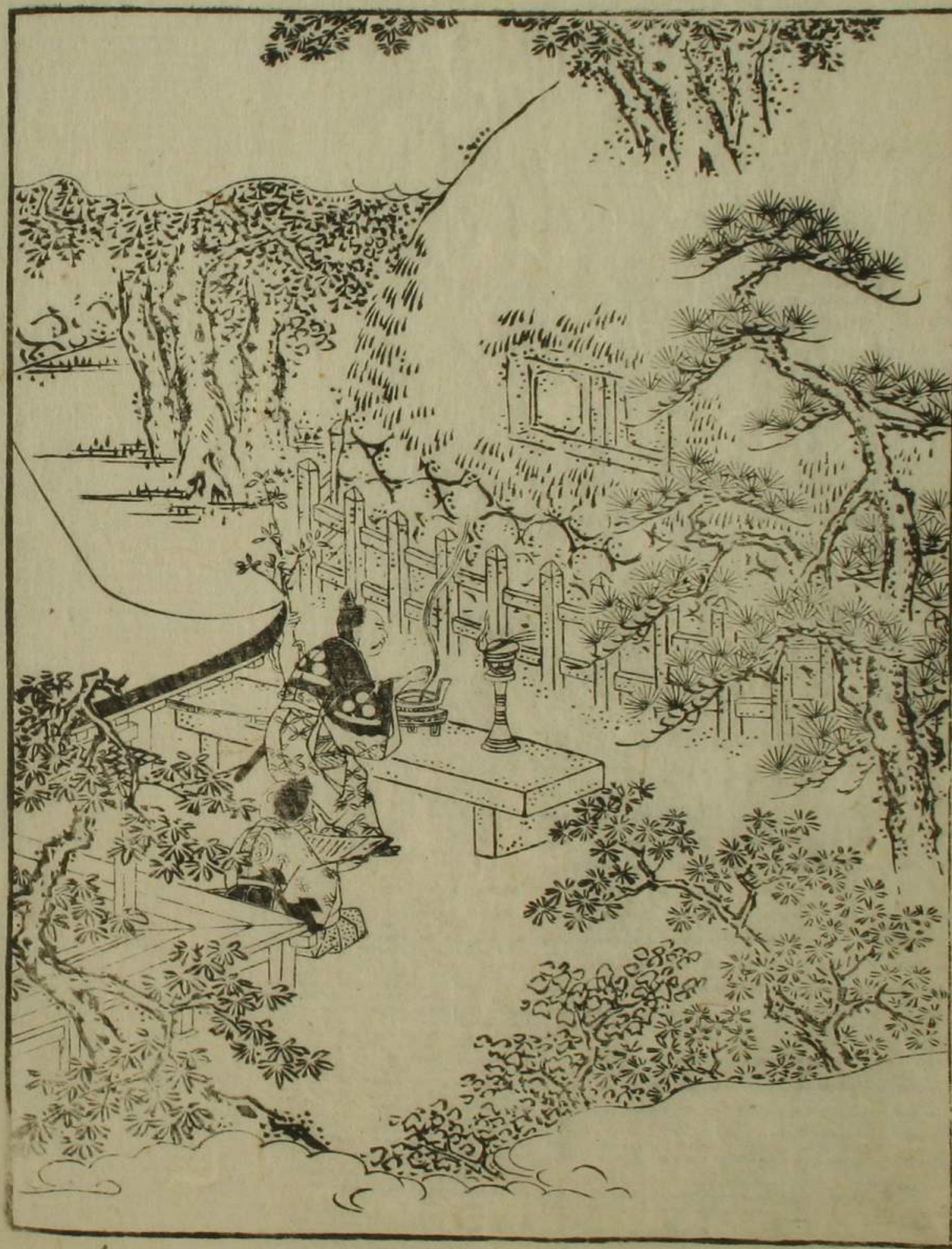
朱權村上冷泉圓融花山五位の聖朝を奉仕し和歌管絃の達人として朝内の昇殿を
聴され武藏振津受洗信濃越前常陸陸奥伊豫等八箇國に轉任して鎮守府將
軍小補せられた晩年に及んで祝髪して後世の假して意に巧く智勇兼備し終ひを所
質息多かりし時同安及事おもく多かりしりても定命既小して空く梅樞の煙を屋
と終ひしるは骨と石櫃に養老法華三昧院の傍に墳墓と築れ葬りて去
は遺骸遠くして同此廟鳴動して天啓と示し終ひたり則天延年中より自相成し
終ひる本條の清和を法華三昧院不安せし遺言不似せし高院成廟所寺と改め
教書他善若き修せられたる

千手九殿誕生

長徳と四年にして改元有る翌年長保元年とある源家の人々去年より心喪を
間たりたれを萬打をそめをうらふ引替て同知度春と逢ふ肥州前司頼光を春宮
大進と必終ひ長男下野判官頼國と東宮學士と必終ひ周防前司頼親を信濃

前

小任せし其外一門四位五位の諸大夫と名官位昇進して勇々しく風を浴中に入
院判官代頼信朝臣へ去年此より心地極く憂ありし公私の清和もしくも
終ひ引替りてこのより引替連枝多くおせし中も頼光朝臣は特小清中眩しく
父子たゞしく思ひ成ゆひしそそよ公妻お存し含まむが務慰はひたり今年廿六日
終ひもいまも定する北方も在りしる公武を分は法家の事我もくも縁成
りし光緒と進せん事と重しかとも頼信敵と聞も入終ひ公成あらはるる
終ひ一門の人々播代の所家のみか公若く思ひよかか果しある所極の様不震く
思ひしに願小至し其子細い知是ふたれ終理命婦を聞へし官女を文質愛敬は
公公操と絶くして物打をくる氣をきて聞人魂が執り終ひ不頼信朝臣何れ
玉を原の垣間見たり其姿女見終ひん慧も深石終ひとある縁と求先夜との消息有
夕終ひも任せぬ世怨と清延年と之聞へるかと公強き様より頼信朝臣は心
援く今人の目も色も子國あぬ神の柵小字名流し一彼の例不身を沈むも何小



徒止るんや千束之數の限るや日毎に消息聞え通りしははるふ主上
成風を聞る極に物部を以て思ひ寄ける事也かの令婦召出さるる迄
この國に居る事と尋さるるは最に恥しむ事なれば申して押解さ
居る頃々の文ども召寄る所は世に非ざるに竟ふ迄事とせりしは
て最切に打怒たる様なりたれを長年食く右年未の思事情なくは
んやゆく則下賜したるに我々も頼信館を以て同様に有難くも亦
考へ給ひて其の縁に頼信館を以て信託する事なれば是れは
形ど真にふれ採る長保二年二月吉日に婿の儀式を成さるる
也し給ふ程に召寄る所は世に非ざるに竟ふ迄事とせりしは
お侍の行状を醫療すも形く早其月には成る長保五年四月九日
男子誕生し給ひたり父母の清悦申すは淡く其頃頼信館を以て
く去々年よりかこふかこわれを則清使事とすは是後守及け事
と聞るは

我清孫没する公地にて喜多小車斜るは早任限えり上落し相見を
是れと名たる則清名公千手丸と名付たり最に母と給ひたり月日
長和と改えり二月九年千手丸後今年十一歳に成りては首服加へ
んとて吉日と稱する頼信朝臣と去ける寛弘年中長保五年守成
公兼奥州守とせり一任是形にして居居りて攝守守成と多田の
たり長男頼國朝臣なりは父子息継多持りて次男頼家三男頼基
梨其次を頼昭とて四天王寺の別當たり女子を人ありて二
給ふされどもいまだ清孫とても形り小千手丸の賢く生ま
て最に母と給ひたり我清孫とても形り小千手丸の賢く生
其清喜科とては其國へは其後捨別館上落の付相具し給ふ
同行とて正六位上兵庫允と成りては其の年を賀茂石法
小兵庫允頼我始に供事し給ひたりされども名を天下に
武家の棟梁

中成なるに其機既承影いまで幼稚の頃より弓馬の藝を精しくして其人の
の耳目が聲の事扱及み及びの中に長和三年五月国白道長公の御館家極殿
へ行幸仕奉あり兼くも行幸なむ形くも或る文人歌仙を召く侍所と御
或る伶倫舞樂演奏しるるの御遊共ありしに今度ハ競馬騎射と結構し
天徳五條を以てとて在京武士の中より弓馬の達者とせし御遊は其日
にありて凡そ先十番の競馬が番せられし其出立みお金襴纏を以て
半臂と一金銀珠玉の馬具を飾り若生渡の時と出立しる御館上階
下に輝波に珠に希有の鞍規形く己ハ競馬半畢く尋常ハ射子と法て射藝
の結末ありし兵庫允頼義と伯父の頼光朝臣と階下に並居く母を以ておろし
なると道長公堂上を過ぐる御遊も是の御館上階と尋常允と居て頼義
御階の下に侍と兼く御館下階に侍る御遊も満仲が縁りて代々弓馬の家を生
息其御館の業は續け奉りかた時より一矢射するも其眉目くくはらげん

前カ

やと裁止むる室ひなる頼義義祥退の色も形く袖撥合せぬと我申されり
頼光朝臣と由公見聞し形ひくゆりしを御傳されしハ母も娘も又孝又小
鷹將大退物射させし人並みも勝せしものも是の御館上階あり素よりおられ
を奉りて固守に射技トははへせん也娘も一と覺束形も両接く公若
思ひのふいと記せし御館上階の直直の赤松の御館上階あり素よりおられ
賢賢格とて相構く臆るし其公早も御館上階の御遊も御館上階あり素よりおられ
たりし加藤景道も弓と矢石寄させたるの子に勢も御館上階あり素よりおられ
御館上階あり素よりおられ御館上階あり素よりおられ御館上階あり素よりおられ
百司法國の受領有藤公崎く並居るに之を御館上階あり素よりおられ御館上階あり素よりおられ
夫所かしも遠く五度の十と志保ひあり上御館上階あり素よりおられ御館上階あり素よりおられ
く心感ざるも御館上階あり素よりおられ御館上階あり素よりおられ御館上階あり素よりおられ

流しおろしつるふ初ゆしく仕成のひなを嬉しくもつと思われ主上様敵意あり
今日の清遊の秀一ありて其真せき歩法はく播く此様共賜る眉目と絶し後いなり

頼光朝臣逝去四天王離散

生者必滅の如くい今本始に驚危なれ小北も中にも持小懸し夕覺し以撰別朝臣源
頼光の逝去より其人ふ尋常形は勇敵最秀ありて智謀亦無雙なり目
如及天下に清守たりかども生老病死の衝免る事能及重病身成犯し今と
限りと見せぬふの達門業いふに及れ四天王公始に清代の家臣外様の良徒を以
て天小惑して醫者療者病手残る所ありて其術を以て之をも更と駭し敢るる公
達四天王公召く亡らん流の事共妻く室ひ是く治安元年七月廿四日享年六十八
にして遂に逝去去後(聖)と斯くも兼く思惟する人も今始る事仕後ふ天地小俯
仰し哭悲し心理るるを平生に改意愛を以てく下坂使ひ一子の如く撫育し
終ひしに惟る惜し進み居るといふ者あり去るる天禄元年満仲後長致仕の後十七

兼ひして嘉業と後大内の守備中として天下に武名と播き十丈の妖怪と結ば修験の
凶徳と伝へ市原の牧童成殊し其母の戦勢勝るを多し違ふは軍と應し旌と
進み所として静澄派致さばといふ事あり位四品に至り内の昇殿を曉され九箇國の
受領と歷鎮守府將軍に補され仕國志く秘ありはといふ事あり智勇権力の良
將より日來いさしと神命日代に進みせん也契する法徒進長も黄泉の旅行随ひり
幸始に法々廟所寺に墳墓と築れ満摩の寺に小遊と遊と進ませり後三葉
終ひし御館と寺院の如く補理く永書阿闍梨の任所として教書に化言を以て
々系父祖相承の靈劔蜘蛛切丸鬼丸等小掛善女より傳られ水破兵使雷上勅
早蕃葉の直念と媽子頼國相傳あり播津國兵庫浦小新宅を造りて小居居せ
られたり然も頼光朝臣逝去の後多事恩顧の家人等後思の父母を失はるるごとく
もの翼と激するところして慟哭せばといふものありたりとも頼國頼光が頼國を
嘉業相違ぬるる一と思ひく小相分る此三を以て春仕しつるる四天王の事あり



隅田川合戦不
 休勢合戦後
 者又水練の
 者どまのく
 浅水に宿る
 先陣を
 當る

遐慕の好子二月の回毎自廟奉公企く如在の禮をそしりたり然るも酒田公時ハ剛の
者の後好くん奉奉意ありとて頼光躬臣を若く思ひあつたれば何れも
妻公も奥せよかや度々作らばれども公時敢て承引せし常にも修つた
父聖賢ありとて子も亦聖賢ありとて或は父賢ありて子愚痴あり或は父
を公法ありて子面貴かりありされども竟の子丹朱あり警賈の子丹朱有公法あり
ア、代々智勇の名將ありとてまた希なり希なり奉とて子孫公法あり
奉の嗚呼たり嗚呼の事とせんより君の清生誰は公忠公忠とて清恩と頼ひ君千
歳の後の行跡をた極あり今も假も不忠公忠なり奉をいども上意公忠なり
奉あり但此奉をいひ清免を奉ありとて一生妻女あり奉ありとて奉をいひ奉三
月の備奉は廟所の奉にて申なる我奉小荒蕪が胸中には下を冷しかりんと
いへ思ひいへ今己小奉足功成ぬ主従の契朋友の眠心の長かりたり清暇申
人々として所領財寶願に再び私宅へも帰らば奉を廟所寺門外より奉を別れて

如く行綱季武貞光も公奉あり酒田殿の形勢や頼も斯まき思ども故守殿の御
遺言目も三人の御公達斯とありまはは酒田を移へて奉をいひたり然るも
も聞入は早行方と共ひり頼も面々の家人共公走りかして退り公先させり頼國大
に奉をいひたりとて頼も公をいひて其行方と求させり公先豆圃足柄山
て忽其跡を見えいへる谷嶺を分本奉此陰に捜索せられり遂に跡を見せり
多と又碓井貞光も公時別私宅に帰らば奉も形く頼光せり先奉奉武が
妹を具して一子と依りて長保年中に時夜不遇く九歳ありて早世し其の
嗣子も形く公を去る天延三年始く頼光躬臣奉仕して四天王と稱せり今奉
治安元年正月時も清身と許され恰も形く頼光の公とて生奉の忠功殿下
以後教養の奉奉三月満奉して其日不中く死し其の後奉を奉育公下
部勅解由判官季武と治安二年其奉七十三歳に病死せり一子武後とて公
らん頼光躬臣存生の時より頼信朝臣不仕り清生綱と去る頃内舎人補せれ

源内をほねり揚津西睡聖とて所不退隠して四五箇年公應々萬壽二年の春に去
去り行年七十二とせり其子源次久を頼國初らふはり

平忠常謀叛隅田河合戦

粵に前上総介平忠常とて者あり其先高望王の次男上総介良兼より四代め
孫とせり祖父平太丈致頼去る長保元年の春平貞盛の四男上野守維衡とて
親した一族ありこれの宿意ありて合戦ふ及なれ明法道博士たりて罪の将軍とせられ
一々致頼非よ落く後波國小碓流され逐水配所より寛弘年中に死せり父左衛門
尉致経は治安三年の秋系於ち病死す忠常は代りて上総介と補せられし
仕終り後領地をわけて下総國千葉と傳りされ維衡の男忠常は正度とて平
祖父の歎ふなかりに父致経が代りて互に忠常とせられ忠常は代りて平
正度の息女の英色と愛く迎て嫁したり物も長元元年の春より謀叛と企て
竊り便宜の言と招き相を結せ謀と利を合戦の用と謀りたりとい有徳何ふ所

平致し為ぬるに忠常が執事千田入道安慶が子太郎亮尚とて者正度が子梅吉が母
子秋津六郎隆平と鹿と射る湯ありて終り亮尚負みたり千田父子との懐を何をし
け返報せざるや中思ひ居りて頼と流るる更く忠常に懇々いふ時正度尊男は
脱を意と去り長保年中致頼維衡確執の事勅裁の上より然も致経の代り無二中
ねるも尚も遺恨と存して尚も公卿人等より一時々々忠常を思ひ公卿
怒り、其言をば不日忠常降し押寄雄とせしむるにそく合戦の要意とせり
とて南國の國司藤原色昌も同意せられ直中押寄をよむ葛城を夜討して致
頼を合戦に誘ひてこれより忠常威衝近國を招き一六國より
勢をく程なく三万餘騎を成にたり都より正度の早馬は先國より頼を
おしく急派告る事成りたりは信卿群衆ありて朝敵退討の評議區々則右大臣
實資公勅とて東海道東山道官府かされ檢非違使左衛門直方右兵衛佐
中原成道を兩大將も定めら直方成道朝敵不應ト七月廿六日都を去り

の東に向ひたる始と其勢五千騎斗りしが路に多く勢あり八月十日武蔵の國府小
て着到を兼座本式万二千騎とせ候し其忠告これと聞て頓て軍の評定して
其身も千葉に城を守り今才陸奥権介忠頼を大将として其勢二萬餘騎あり
國隅田河小打り出河より南小陣を取去候は官軍式万二千騎十月十二日の未
曉天より陣を進先我生立りて鳥名せんと競ひ争ひて進み河川橋も打落し
渡さん候れども瀬瀬もたぬ之河をわたり馬と打入られ候も折く是國忠
とせよりける敵陣も候る事相違を同く國を合せたり左右より復不救も
ゆいふとく敵陣と見え上の瀬北河峯の擁擁にたると其法本射子と置
しと兵四五百騎馬を後小まさせり杖小まがゆりかへり中の隊下の敵は川
端を去事十二三所ありて陣を五箇所小備より既不交合の漏矢射せり
官軍河端小打並んごいげくや候瀬あらんと疑ひ居られども敵の備密と々
して然も思外の大勢と見知りて恐れ忽勢と告れ進海と遠矢少く射りけり

針す共日も其日も其日も亦苦候とて敵も素より渡さる味方と恐れ候し得
唯矢軍斗はく暮々後軍も折る事ありて行ふ十四日の夜小入り直方成道成
始先法大将一所小會合して明日の軍評定ありしに成道比合才伊勢介成俊進出
て申され候に昨今の如く申て早晩勝負ありしとも是迄朝撥小應トて運
や死する身が大河小橋ら且日投をせんと候小云甲斐よく是後明日の合戦小
能くは成俊先陣を給くは川の瀬踏して濟方此兵と小快く河を渡させ候し
と事りも申されし成道方の家子梶井小五郎定勝末座の意見鳴呼と申
し候に退く愚をせり候し作は濟方此兵に長き事ありとも是内と申
ぬ大河を渡さば瀬はべりとも是迄敵の陣を棄す小まづ上の瀬を大事に
射子狐投多むと申すは所淺瀬なるは官軍必渡とて渡さんとする所を渡法は
川中申て射く渡さんとの爲とて又中北瀬下の瀬小兵狐投して引退し
陣をとりし御方の退くを攻りし事候は千がら渡さんとて國をわけて



源頼信忠常返治
こころ、東國に
出陣し候



川端本馬の駐場を議し、河原の兵馬を河原へ移入せんとす。時相意は無く、川原より人
所を防がんの爲に、然る本勝を以て術を巧く申す。斗はくはせんよきだに、川
中へ進め、先見見苦し、負成せんや必定ありと、それを以て用捨ある賢と先づさる
を、やた右小會釈して申す。後座の茶河も、一歩せり、所不直方、咄々
思惟して、空ひつちを勢別の見見滅ぶ、然るに川を穿る合戦も、海つ兵馬
川を大軍で責得く、其河を既渡せ、おぼせられ、勢恰鬼神の如し、又防々兵を揃
え、思ひの不振切なる川は渡され、忽氣後進多く、敗るるとの、さかみ、はくはく
徒小日と送れば、河原の兵退屈し、飲み、勢着、明日の合戦を勢別
先見の、河を渡して、残るを、然るに河原を、先陣と進ませ、但
河原は、秘令、少く不足、思息、作聖教、石具せられ、進と有れば、成後
斜に、兵喜び、委細、作今、夜、私の、義、不、進、朝、敵の、法、大、軍、少、作、の、を、兵、渡
界の、義、不、進、朝、敵の、法、大、軍、少、作、の、を、兵、渡

陣登に改り、軍藏、小、直、方、此、婦、子、阿、多、見、即、聖、教、を、勢、千、二、百、餘、騎、を、
引、か、て、成、後、が、軍、少、く、不、足、思、息、作、聖、教、を、勢、千、二、百、餘、騎、を、
見、せ、さ、る、兵、不、波、水、練、の、者、能、見、さ、り、て、輝、悉、く、申、す、の、大、軍、之、兵、を、出、し、
防、を、上、の、瀬、水、も、さ、り、て、深、く、杯、を、忠、角、尖、く、馬、の、足、派、立、た、は、様、を、形、
下、の、瀬、水、も、さ、り、然、る、向、の、岸、屏、風、を、立、て、如、く、中、を、渡、ら、ん、幅、も、形、中、の、瀬
を、流、し、早、々、れ、河、半、より、南、へ、渡、り、て、水、を、鞍、立、を、越、し、程、の、半、も、あ、る、は、く、作
聖、教、申、す、を、聖、教、法、願、を、し、り、て、陣、を、破、て、成、後、も、右、と、さ、り、士、軍、も、た、結
て、十五、日、の、計、刻、に、案、内、者、兵、を、二、三、兩、勢、合、て、三、子、好、騎、同、時、小、馬、を、折、入、合、て、三、子、の、騎、
派、取、り、り、波、を、馳、走、り、網、を、う、り、て、遊、び、上、の、瀬、水、川、を、小、陣、を、立、て、成、後、軍、の
派、を、派、見、す、く、相、圖、の、致、を、得、し、け、し、忠、頼、が、本、陣、の、一、陣、二、陣、と、軍、を、立、て、成、後
聖、教、安、々、河、を、し、り、て、直、方、成、通、あ、り、行、と、か、續、き、都、合、合、り、三、千、餘、騎、
喚、と、叫、ぶ、渡、り、り、先、登、の、兵、を、河、を、合、し、り、渡、り、河、後、陣、を、い、く、進、行、す、は、

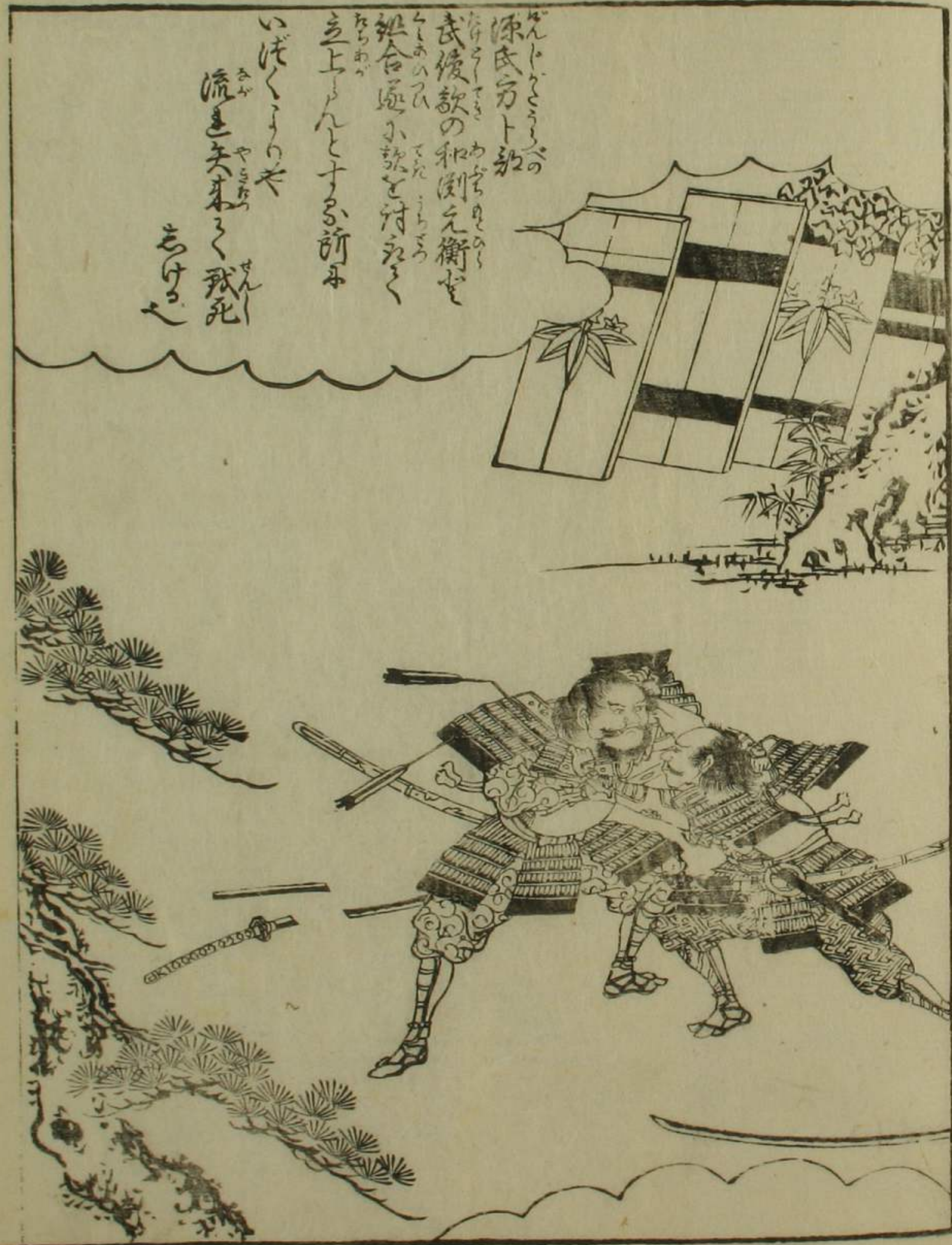
久勇がさん志頼が陣へ寒くも暮るる故も兼く勢ありしを思ひたればた
右小射子と云ふは久義孤作と散々に射る先陣の兵これれも敢て僅にま一文字
に蒐通し志頼の陣四千餘騎思外切され二陣小讓して引退く成後聖教も共
本壯人の若武者多ればははははと機を屋せば馬も進先隊孤長井及び同馬を
はよまがけこの物小狂ひの久義子の久河を渡して然も敵の堅陣を破り人馬を
はらまはす久又荒れ敵中らんの血氣を申べし既小昨夜の陣約倍のどく
今日の先陣して敵の二陣級へゆるえの陣も亦荒れに備う一息休く又も敵の
陣中至仕一本は固兵をもつて我々の一定方敷しおん然る先登の首名も却て所
高き少成へばと再之止れ中々成後聖教もたも右もとて相りも引れがを
し所小宿軍二萬の子餘騎み久河を渡して入れどく我々の其勢然る小陣
易しく志頼が兵どもの陣の張様整にあられどく見し所を宿軍得たりや
賢也縦横小蒐まは忽爾と之を驚かしけりつと先とて迎へし志頼も言上云田一也

また者共い敵の大河を渡してははは馬共小疲りたり返せくせ呼れども耳も重なり
陣入も志頼も冷方ゆく三四度程引自返し合を退退けたり流石に我疲れれば馬を
早老く千葉城を奪えし志頼の先登も宿軍河を渡してははは陣を固くして一定
味方敵へおん敵北とて退く攻めよと荒れどめく程を防が勝せりしははは
ははは張る兵一万五千餘騎各味とゆく西の幕の森陰小陣を固く待りけりははは
固の森まは近く陣へ味方れははは何となく痛く我々の重き為りてははは所究
些おぬ者もゆく味方小退きけりははは城の中へ直り兵の軍を固くおせり志頼陣を真
私して漸く小退きけりははは城の中へ直り兵の軍を固くおせり志頼陣を真
辨小成通し陣の接合より閑々空ありたりははは宿軍は荒れし勢も蒐まれば兼報お
て迎へし志頼もたもははは力なれと捲き退退小後陣の直方もははは流石に推
えられおははは引返り後軍の士軍以集んてははは隅田河を渡り陣を固く

頼信朝臣東國發向

厥后相續と直方成道と子搦子とて千重城を攻らる半を奪りしかば中以外小法
して信軍毎に負名を重く軍議ありて國々運送の道断絶し食攻ふせしめて
左衛門佐平直方の隅田河下城を多々侵を由一國を居て武藏相模の道を閉右兵衛佐
成道ハ安房守光業と一々成り上総國伊小名要害として安房上総の通路を塞ぐ常
陸介正度ハ同荒本に出張して歩法奥羽の運送を止せり玆て今年も言く長
元二年に成ぬとて雄雄いまで決せられた將成道と光業血氣の勇者形りて我より攻
落して高名小備んとて相國の約を違て攻奪しかば利きに倭小成道と拔意せり
より起り嗚呼の高名せんとして信軍の勝利を告いし半よと法人の遊びくせ
有る斯と都小圃へねハ殿下作せりハ九六將副將と左右の羽翼の如く士平少
安危を共りし水奥のてくすふ兆どんと争う運械を征せりと得ん成道大將の器
に非と自之のむけと有て毎度津方の約を守りぬかふ無功の將を用るハ却て欲ふ
勢と付る形りて同年十二月中原成道を召返されふり光業と近上り政輔と

あれどもつたぐりて安房上総下総三國國少を人として忠孝小備せり者かく
威衛八列を吞と我を見へ小なる去きより荒本に在陣せられ一歩凌介正度も度々の軍
に手勢多付セカ形く中園上陣に今ハ平直方斗を尚も隅田河小交られしは平直方
勢も失割其身以外小真例し致し向え半ゆみしけいしとを見へられぬと京都へ飛
脚と進くせく直方采新の妻身小迫とて起居と安んせし自銀錢を把と強敵小備ふ
憾に結とくハ不考の將帥を止され有功の武將小令として征伐と遂に免後り仕へせ
再三奏し申されしは法卿會法ありて直方將帥の器とされハあはれとて一も東國
の士平いまで其武勇とを以て是を以てこれを致せし自縁成失り即申後る旨
に任く直方と召返され早く其人を拵んく征伐を遂らへしとて重く進付る軍
と擧われり小故搦別頼光朝臣の舍弟源朝臣頼信と其思代名將の承安也兵衛保
の人形とて群卿の儀と小解せり抑頼信と去居實仁四年河内國を賜り四市
那寺に奉奉小城を築た日九月十日より小居後りし其後治安三年八月鎮守



府將軍ヲ補任せられ奥羽に下向し終一任無事にして河内小幡王又甲斐守小幡
世られ今甲斐守任しておつたれ息男左馬助頼義と居て忠常父子追討の論旨と
成下され意かこふ終下て頼信小幡と父子相共み下終進發して朝敵退討せ
しむとれ有とせ作合はる頼義頼余にほひ合身多相具一甲斐國あぞまかれ
る所頃て件の論旨父頼信小幡世進せられは頼信これを頂戴し斜うは喜のひ
當時の眉目何うこれよとらんやとて志を固く相觸く軍兵と催されたる小東海東山
兩道の勇士等いよもくや馳集りて雲霞の如くふ成はるりはは時日と接へるに
そく長え三年十月十八日甲府をおとすひたり

河越中野合戦ト都武後最後

斯く平忠常の源頼信船に追討使として甲府を出陣し居ると聞くと河内も兵を
出し路決りて相支へ居候は直都に攻むべしとて舍身陸奥権介忠頼嫡子中
村を即忠將を兩大將として其勢四萬五千騎行んが所中でお出雄と突へ

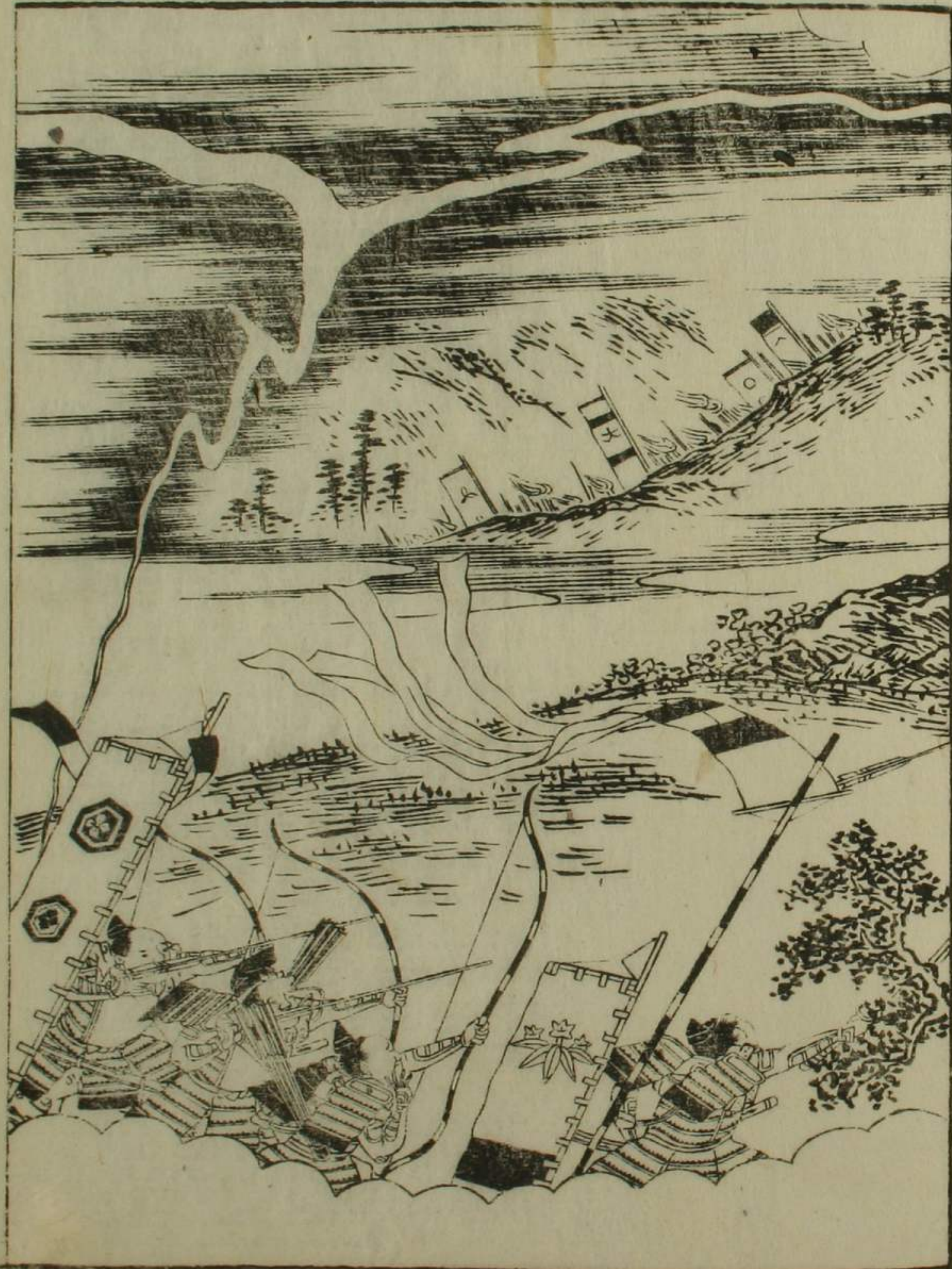
さて千重城をおとさるり同日廿日源氏の勢五萬餘騎武後國松本陣をたひ平家
河越小幡より其間僅五平餘町あり既本日暮らねる時日子合あそりそ兩陣皆不遠無
を然く夜心も熱く源平共は阪東生まの武士共るれば一夜の暇を待無く陣を去
り陣を去せ陣をよとれは山川須史亦奮勵して夫々守る地を棄と戦ひ終りしも
思われ早夫合の備矢射違る程をわあは千騎二子騎五百騎三百騎餘は進先細戦と
交へ入るく残さるりみか今度の軍に手柄を離しあかんと義を專らうを勵
にとい殿の戦場の塵に埋かとも一足進らるりて夫下は小幡と相見するかや父は子と
制し即渡らるる公勇て子負死人を棄誠く戦へば何事隙ありとも見へは一筆に死
なせ争ひたる終の如くする年三月三夜ありて源平俱小幡ひ芳は互射しど如し
軍に成小なる時小頼義の陣より相疊の狼煙とあびるればかここれ山間より三子騎
頼義の舍才と兼三郎頼季將忠頼が後陣小付くかここれと思ひの外あく後
陣の備破せられ夫長軍思へとも付は源氏勝みあく隙もあせは残へ忍ひし

麿はく逸足出でて迎ふるを原氏續くはげくまでも退るるれども早瀬別ふり
それ案内をぬ所を夜小く敵人の若解車やあふして懸と長遊のせりたり
懸て軍の始り平谷に陣ふ千五へ軍使をまき軍根の齒を引くはれ
けは忠孝合戦の足先委く聞て故に國中にへる始終急りおんとて又荒る
をいべしや後馳ふ来り安房上総の兵一萬三千騎を相交(武蔵國)ぞ指
たる物ふ廿三日川城の軍破して後權介忠頼は月田岩附陣をまき中村を即
忠將を月中中ふ屯して敗軍は士率を倍所小千番より荒る路決めく味方の
敗水の糧を厚く月廿四日一萬五千騎を忠頼が陣ふ一萬騎を忠將が手ふ加り
し程小兩將又機と得く懸く軍勢は合しける小忠頼が陣ふ加りし兵みふ集
勢めく其公二形に軍將の懸ひふ分と強してさなく違乱多りなれを忠頼が
軍を行す丹波司馬延制し兼て又分と整て始り有し武万騎の陣ふ
まき一那くの兵と千騎二子騎の推して軍を五つ分て荒るればまき一軍有

懸るうて先陣ふ備き入替く一息はれ我れ不支度してまきはげくは忠頼が
陣ふも今度の荒る先陣をまきと程瓜分し一萬騎の荒る三つ分先陣ふ
まきとせし備は廿五日甲斐守頼信居其勢三万五千騎も中野を推寄の
を左馬助頼義武万騎も中野を向り進る月日已下列り双方は時ふ合
ありに忠將が陣ふ先陣荒るれば一軍して一面目ふ備んと火を散り我れ
中の一萬五千騎を我れ先陣破せよか入替く先夜の我れ守と守方の兵と
好る不忠の極みは後様なれまきと岩付も中野をへて是れ勝負のなりし
に廿六日の軍最中に忠頼が陣ふ六尺有餘の大壯男の歩立形物異爽小
ては足條の六を刀霜して切廻る其骨柄城小一騎あふと火打物も最上の級と
まきと向者まきとて令助してるなりは原氏の兵も進りてまきと之れ彼者款
張四方小進らしてまきと名乗るる者陸田和利又六尺有餘の者板
八羽あく一二の力もまきと今度千乗後小懸進りて昨日よりは陣ふ在り

為江中救死をばされどもいと腕不骨ある武士も遂に津やほらぬ六天王こそ恩
 神のぞく呼とく人のいせし由は陣陣ふも其子孫のおいぬ事ある事ト出入くえ衛
 かの垂の極死見給ひ冥途の果ふは仕給へし侍若無人ふ呼まらばト初季武が二子武
 俊之れを聞て唯一騎無出し和剛殿を辱んぬのいふと度々の國は是れいふと
 下の子孫を見給ひ終り六四天王を慕われト部判官事武が二子七郎武俊之我達
 手もやと給らんやと馳せし和剛殿へ毎さるる見給ひとせしとせし本の乗れとて
 武士共五六十や百斬らんとて物の救めて死なれ我給へし嗚呼とて一偈打抱しと
 兩陣の事に暗を覺せんといふとふ徳中も血小深しを刀を益付て押試
 さいまうさうとや打ちく惹るト部志がや留免濟をいふとさし馬の上るれば刀
 打快も思はゆ我も下してまのせん也剛馬より下りて刀を抜給り大
 成知し時後ふまで幾ひふ和剛殿が刀の今終り多くの詠歌切く落しけれ
 在りや二ツ折と飛ぶなり和剛殿いらしく偈組ん其美や及びト部志を刀と棄

て我知るる雙方陣や大カト部獅子は急を知らせ和剛殿の勢と出し一時斗
 採合し小更に勝負を見給へしと結り軍と止見物して居たり一兩陣の兵も退
 屈して居たりと部志げん小勝折と見えし和剛殿へ終られ真度小勝なり
 ト初紀しと立ば徳角の上小宗かめと矢時和剛殿の働き驚入し作し四天王の子孫
 が擁護申すのふ者ぞ津中が冥途の果れせしや首撥落し立上りんとす所ふト
 部が運やとてうらん何事うたさぬ流矢ト部が肩間の真中に悩を碎く立上りて
 大事れなればト部志を杖を棄て身捨ひてぞ立上りたるト部が家の子三百餘
 騎以給り津方此真先進ん主の打物と見えしとすいと云ひ合んとし津
 松谷と居りしがは掃を見給へしとておまきづ撫の板ふおと真中に引色んと
 が陣屋小入にたり源氏も腹をとおぼしむるト部初痛を負ねれ大將の津を
 勇れく不真氣に見給へしとて懸く其日の軍止むなり平家にも尚千を懸し
 兵を討せば源氏軍と止れしと幸も月く軍と大とくなり斬く武俊とて



看病はしども敷く事なく大將頼信物居も自卜部が陣を小入りしついで中士郎
公地は同少入ト部大將の御多や圍く最殊氣見見(は)物とも云はれぬ
流る血两眼致寒さねを見る事も叶はざりしと招出しと大將其子と取給ひ
力なれ幸哉田代の忠臣瓜主も形を流矢小命瓜共小幸あせ奉意なれし候を
流矢ひかり命かき此人ありて此死は違ふ事なく満座被を活したり僅小二時計其
て其後の成列小享年三十九歳に遠小空く成ふたり頼く終る是れ後瓜流ト
物具を刀刀弓矢馬鞍まで倍の洋小送り形のごく葬送して其跡を吊給ひたり

平家敗北忠頼忠將死

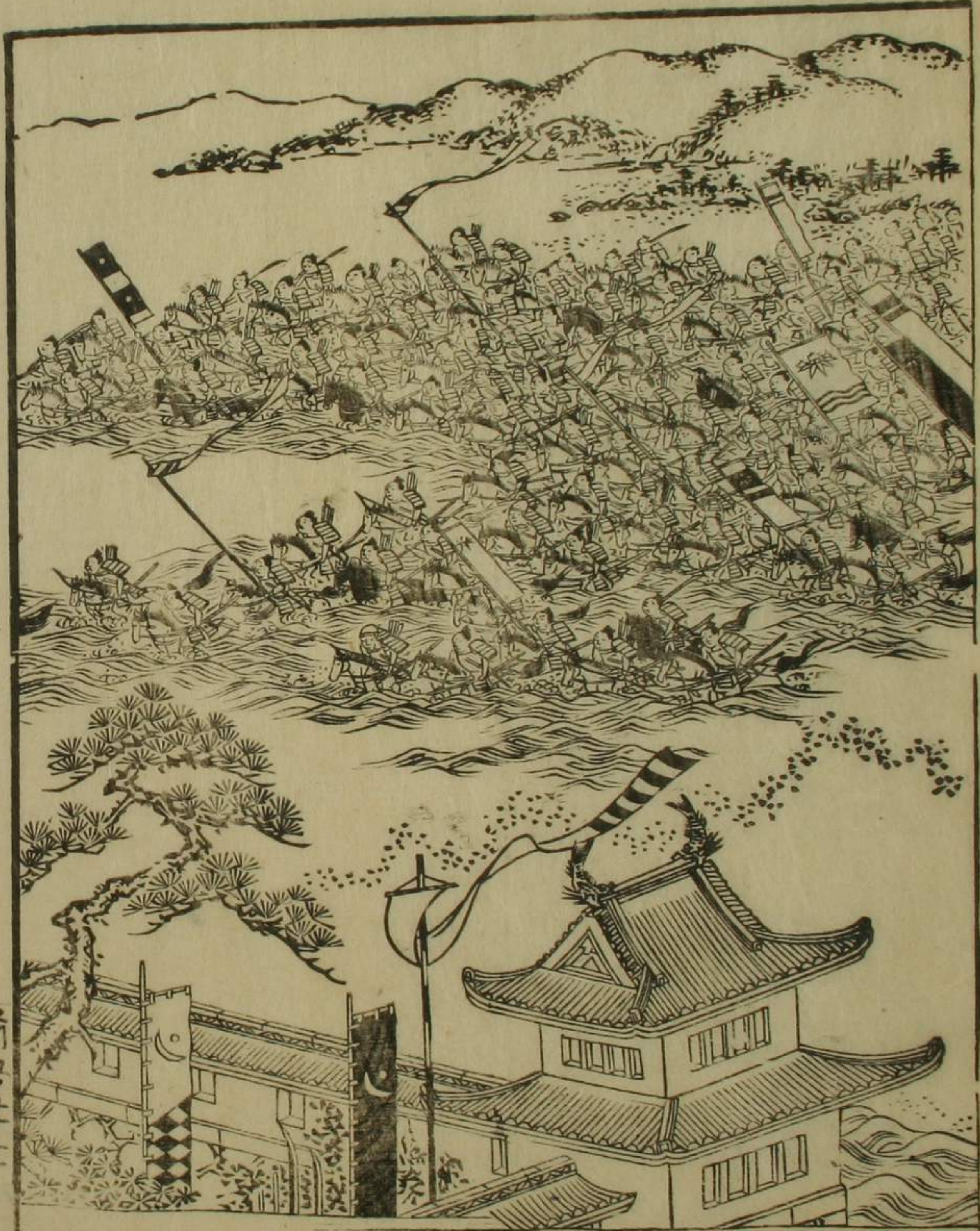
昨日とト部和例が討死よるが兩陣軍放止れり同雄雄つるが交はれ今日と兩
家北安危此一挙小と源家の士卒み形勇進む外刻より大將詮の手とト一
平家も同じ陣とあつた小先陣の荒子圍此集り勢も是れ我を人の大半小あつた
らハ敵強はれ他人小進り進を鈍く退く速めく暮る後も幾は源氏の陣

平家小入同郡司章隆と大將の御弟に召れ貴重と南園の嘉保傑として些も案内
者な且今夜困道と危く候好らんが所小兵伏軍此最中形ん時相益の相と
な一其時款の後陣より一高當り見送りせ置ひなれ章隆子細く領事
乃其勢八百餘騎あり一又家子大宅源五光家相源れ彼是都合二千餘騎備
に骨より打て出共田村の在家小兵を宿し旗を伏せ居りける去程小源氏平
家此兵今初刻の最より午刻の終まで十餘夜の戦ひ小負ひは候と者幾千人
とら一殺をさし頼信物居款の執務と関く頼て狼煙を擧させれば入同大宅が兵
楠を叩き戦ひ鳴し一懸波を弛く風のまきさるごとく進より持介忠頼此も驍先
陣の兵と始の如く源氏の幸陣をまさせ後軍の勢より北首小馬と直一陽小開
て待りける入同大宅は陸小開く中破らんと直一文字小急通を喚叫り幾たり源
氏と陣を踏異小まき短兵急小拵んとすれを忠頼今は是まてを思ひ四角八面
に相向く身命孤棄く我は幾たり源氏の兵これをも知るはど中に取討ん

忠頼も今や毎夜敵小向の一夜も利を失ひし事もなれ今夜の合戦は
負どて幸生殿の不足重く人小面を合はしき揚るし一向討死しき定々れを切
ども射さども用いませ向ふ敵は嫌む太刀のみは堪ん限や鞭撲無ら小切く廻ふ
其志偏ふ大将頼信の直小勝負瓜皮せん為り去りも源氏の運や好まらん運
近付得るる忠頼も其身金石も惜まれを今晩後く横方までぐねいやく懸
おる敵の子不死んとい快く自害せばや中々の討死されたる兵三百騎ありなるを引
果して馬の鼻瓜引ひは勇将の源氏の勢争う渡りやるさぞ中を跡と追ふ
菓の行今を付纏る兵ども形さぶらふ今瓜皮揚むさうもせの二十騎かこは
ハ二十騎返合し討死したる同忠頼萬死を免れさう遠く我を落延る今いまは
追ふへともえは揚り行を死途の敵あふたれも非をを思ひなれば自害とさ
定し忠頼忽心寛く千系へ帰ん又中野のいぐさうぞと其様もえ米
形かるとおれとを引し同馬を打さるる小運ふり白袴三流さうさく勢

極武の子勝三子小使く進善所忠頼これを見し何様中もさの追國の討死は源人
の物具利んとて源氏の方人さる形は何程の幸う有さぞそ表散して通んと馬瓜
勢は見え入間大宅の両勢さく二方より源瓜皮は散るも射さるる忠頼を
主従僅小三指武馬勢はさく亡ひつ持楯一枚も射さるるを防死様もさく互ふ
目と目瓜見人存楯果さる討さる若野を直先進も尾落さる敵の拳劫やふ
大津の敵瓜遠夫めく射る様やある奈す所追國の好伏奈又浦々の海賊等が汝
若若實の武士なら何れと名乗追討善く勝負せよと叫びたりさども大宅も入
間も言然の益さるりとして耳も無た当敵も射さるる忠頼今もさるる夜
おる三指武馬とさる小ま其中は物具既棄心用小腹と切りたるこれを見て
三指武馬の兵思ひし遠へ上り小重も死に入間大宅が勢走さるる小首と
切く直小大将の陣陣小奈を夜はのくとおる小首頼も首共無指小曝
さる小首給りたるを大将甚感はあは忠頼が首瓜さう先一々小奈首小

源頼信の
騎馬
海孤り
忠常と
城一



掛らねる中世其平家北士率互に先陣と争ひつゝ同味方北志一なる源氏
 多頼義頼季身命公憤ど幾い給ひつゝ後小忠將竟不致やして千景味へ
 せかりつゝ忠孝の四萬騎の軍兵を率一武彦山岩淵とて所に出陣して去年
 の冬より味中少て格依る檣檣楯陣所悉く運籌一疾の中に城郷と構ふ所て
 源平を孤出し昼夜挑み幾くは源氏利をうらみ付あり平家致おする日もちて
 搦負更不交せだてて三月下旬お成にたり源氏又五万騎孤率して岩淵お控へせ
 日月亦五日の辰時より子令せて搦孤おせだされ味中少も息もほげに
 こ絶を防ぎ午角の軍もせ有る搦ふた馬助頼義頼房毎夜所方と離れ
 獨身とぬく跡跡むる程不別経景通等かく練くこ是と將の所おあはれ
 一向士率の早い訪り若許身不僻半有る敵の機を以て所方と海とをくへ
 と練云と之に進せられた頼義言ひつゝはさまたはれ我一方と承くこは向
 ん付るは佐將の令伝司く下知とて半せせ免今守殿の大將軍とて士率の

